

**<学会記録>20. 要介護高齢者の歯科診療に関する一考察：本学歯学部附属病院における当科の取り組みから(東日本歯学会第18回学術大会一般講演抄録)**

著者名(日)	高橋 邦治, 越野 寿, 平井 敏博, 高田 英俊, 石島 勉, 横山 雄一, 小西 洋次, 寺澤 秀朗, 飯田 唯勝, 中野 健治, 松原 国男
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	19
号	1
ページ	127-128
発行年	2000-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00008515/">http://id.nii.ac.jp/1145/00008515/</a>

さらに、健口体操と称する口腔の運動や、アイスマッサージなどを実施し、嚥下や咀嚼機能の回復を試みている。

(まとめ) 最後にまとめ、あるいは問題点として、診療室とは違う環境のなかで、できるだけ診療室に近い条件で治療が提供できるよう、器具材料の利便性をいかに高

めていくかという点、また、治療が歯科医の一方通行で終わらず、ケアした後のケアをしっかりと継続していくという点、さらに、全身管理も充分視野にいれ、内科医を中心とした他の診療科との機能したネットワークを形成していくべきであると考えている。

## 19. 社会福祉法人「緑星の里」の特別養護老人ホームおよび老人保健施設における口腔ケアアセスメントについて

○井上 真希<sup>1,2)</sup>、道谷 弘之<sup>1,2)</sup>、小島 薫里<sup>2)</sup>、  
内田 暢彦<sup>2)</sup>、畠中 千草<sup>1)</sup>、金澤 正昭<sup>2)</sup>

(北海道医療大学歯学部附属病院緑星の里歯科診療所<sup>1)</sup>・口腔外科学第一講座<sup>2)</sup>)

特別養護老人ホーム(以下特養)および老人保健施設(以下老健)は、いずれも要介護高齢者のための施設であるが、特養が長期入居者が多いのに対し、老健では短期にリハビリテーションを行い、社会復帰を目指す施設という特色がある。このことから、特養と老健では、性格が異なり、入居者の口腔ケアの状況にも差があることが考えられる。そこで、今回、我々は、苫小牧市にある社会福祉法人「緑星の里」の特別養護老人ホーム「陽明園」、および老人保健施設「東胆振ケアセンター」の入居者について、看護、介護者による口腔ケアアセスメントを行うとともに、特養と老健の比較を試みた。アセスメントの結果から、咀嚼機能・嚥下機能の低下は、特養の入居者で高く、義歯や歯の問題は、老健の方が多かった。さらに、口腔保健行動に関わるADLは、うがい、および

義歯の着脱で介助を要する割合が、特養で有意に高くなっていることがわかった。これらのことから、特養に比べ、老健の方が自立度がやや高く、入居者本人の自主性に任される部分が多いことが考えられた。なお、今回の調査では、口腔清掃状態、歯の問題、義歯の問題について、歯科医師の評価も合わせて行ったところ、いずれも、看護、介護者の評価に比べて、著しく高い値を示していた。このことは、歯科の専門性の高い項目では、看護、介護者の見落としが多いことが反映しているものと思われた。以上より、特養、老健ともに、口腔ケアに介助を要する機会が多いにもかかわらず、口腔ケアの状態は充分ではないこと、治療を要する口腔、歯、義歯の状態が多いこと、看護、介護者の口腔ケアに対する認識が必ずしも充分でないことが示唆された。

## 20. 要介護高齢者の歯科診療に関する一考察

### —本学歯学部附属病院における当科の取り組みから—

○高橋 邦治、越野 寿、平井 敏博、  
高田 英俊、石島 勉、横山 雄一、  
小西 洋次、寺澤 秀朗、飯田 唯勝、  
中野 健治、松原 国男

(北海道医療大学歯学部歯科補綴学第一講座)

I. 目的 高齢者が質の高い生活を送るためには、咀嚼や発語をはじめとする顎口腔系機能の維持・管理が不可欠であり、義歯補綴治療の果たす役割はきわめて大きいといえる。一方、要介護高齢者においては、身体運動機能に障害を有することが多く、歯科医院への通院が困難なことが少なくない。訪問歯科診療は、このような患者への有効な歯科医療の提供手段の一つであるといえる。

しかし、訪問歯科診療は主に高齢者を対象としているため、治療に際しては偶発症の発生の確率が高いことを認識しなければならない。なお、患者の主訴の多くは義歯に関連しているため、当科医局員が対応するケースが大多数を占めているが、義歯補綴治療においてもこの点に注意を払わなければならない。今回は、訪問歯科診療における当科の実績から、その留意点についての検討を

行った。

II. 方法 調査対象は平成7年5月から平成11年11月までにわれわれに受診した要介護高齢者123名(平均年齢74.6±11歳)であり、各々について診療場所、診療内容、処置回数、および患者の有する主たる基礎疾患を分析し、訪問歯科診療における留意点に関する検討を加えた。

III. 結果と考察 処置内容に関して、歯の欠損に伴う有床義歯補綴に関する処置が全体の約83%を占め、その内訳は、「義歯の修理およびライニング」が56%、その平均診療回数は1.5回であり、「新義歯製作・装着」が38%、その平均診療回数は4.6回であった。診療場所としては、「患者の自宅」が59%、「本学歯学部附属病院」が8%、「患者の入院中の医科病院」が41%であった。なお、「新義歯装着後あるいは旧義歯の修理、ライニング後の義

歯調整」の平均回数は3.3回であった。また、基礎疾患(1人につき2疾患を上限)としては、脳血管系疾患が68症例、循環器系疾患が25症例であり、両者を合わせると93症例であり、全体の76%を占めていた。以上のことから訪問歯科診療においては、有床義歯補綴が主体であり、平均診療回数は通常の外来診療のそれと同程度であることが判明し、訪問診療であっても通常の術式での診療が可能であることが示された。また、在宅要介護高齢者においては、急激な循環動態の変動が重篤な合併症を引き起こす可能性がある脳血管系疾患と循環器系疾患が基礎疾患全体の76%を占めており、診療時には患者監視装置などによるモニタリングを行い、安全性の確保を図る必要性が示唆された。

## 21. 歯科衛生士専門学校におけるホームルーム活動の有効活用について

○長田 真美, 沢辺千恵子, 大山 静江,  
岡橋 智恵, 小田島千郁子, 五十嵐清治  
(北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校)

歯科衛生士教育では、知識・技術・態度の統合を目指した教育活動の展開が望まれている。

しかし、実際の教育現場のなかでは、今日の学生を取り巻く生活環境や意識の変化も相まって、人間関係の稀薄さや規範意識の低下から、従来の指導法では通用しがたい場面が見られる。

そこで、本校では毎朝I講時目が開始される前の5分間をホームルームとし、学生集団であるクラスより良い風土づくりの時間として活用したところ、良い結果を得たので報告する。

**対象及び方法** 歯科衛生士に必要な職業人としての意識づけ、さらに医療人としての資質の向上を図るために日常の身近な話題を選択して、繰り返し学生にアピール

する方法をとった。評価尺度には、ユーザーである学生のレポート(「医療人に必要な態度について」)を用いた。

**結果** レポートにみられるいくつかのキーワードをカテゴリ分類して集計したところ「態度」に関しての友人の影響が大きく、集団を構成する学生の個々の考え方や行動が学級全体に影響を及ぼし、人間関係の形成に大きな役割を果たしていることが分かった。さらに、学級集団には、学生のやる気を引き出し、学習や社会性を促す機能のあることが推察された。また、望ましい学級風土を形成するためには、学生一人ひとりの行動や心情を深く理解し、受容的かつ共感的な雰囲気づくりが必要であり、それを教員が支援するのが望ましいと思われた。

## 22. 臨床実習における看護婦のかかわり

—歯学部附属病院の特徴を活かし魅力ある臨床実習を行うために—

○小野 政子, 畑 了子, 堀 富江\*  
(北海道医療大学歯学部附属病院看護部・  
北海道医療大学医科歯科クリニック看護部長\* (前北海道医療大学歯学部附属病院看護部長))

《はじめに》今年度の臨床実習では、歯科衛生士専門学校より、学生の個人評価表という新しい試みが提案され

た。そこで、私達看護婦も、学生の個性を細やかに評価できる実習方法の検討を行い、実施してみた。